

修士論文概要

中国人日本語学習者の格助詞「に」の誤りに対するリキャストの効果

—学習者の既有知識と個人差に着目して—

方 億 (FANG YI) (博士前期課程 2023 年 3 月修了)

第二言語習得において、学習者の誤りをどのように訂正すべきかという課題が関心を集めている。訂正フィードバック (CF) には様々な種類があり、そのうち教室で最も多用されるリキャストが注目されている。これは、「学習者のエラーを談話の流れを遮らないように相手が意図した意味内容をさりげなく正しく言い直す CF」(名部井 2015: 42) である。リキャストは学習者に誤りに気づかせるが、暗示的すぎて修正機能を意識させにくい可能性があるため、有効性について研究者間で見解が分かれている。一方、日本語の格助詞は卓立性が低く(菅生 2012)、中国人日本語学習者 (CJL) による誤用が多く見られ(蓮池 2004 など)、習得度難易度が高い項目の一つである。しかし、格助詞の誤りに対するリキャストの効果に関して検討がまだ不十分で、研究の余地が多いにある。

本研究は、中上級 CJL11 名を対象に、学習者の既有知識と個人差の影響に着目し、格助詞ニの「着点」「存在する場所」「形容詞の対象」という 3 用法に対するリキャストの効果を探ることを目的とした。研究課題は以下の 3 点である。

RQ1. 学習者の既有知識はリキャストの効果に影響を与えるか。

RQ2. 格助詞ニの用法によってリキャストの効果は異なるか。

RQ3. リキャストの効果に影響を与える学習者の個人差は何か。

調査では事前・事後テストを設けて学習者の知識を測り、絵描写タスクとストーリーナレーションタスクで処遇を与えた。参加者の個人差を把握するため刺激回想インタビューとアンケート調査を行った。その結果、RQ1 について、リキャストの効果認められるために事前テストで 6 割以上の正用率が必要であり、学習者の既有知識はリキャストの効果に影響する可能性が示された。ただし正用率が 6 割以上であってもリキャストが有効でなかった上級参加者もいた。RQ2 について、リキャストにより「形容詞の対象」の「ニ→ガ」の誤用は減少したが、「存在する場所」の「ニ→デ」の混同は軽減されなかったことから、格助詞ニの用法によってリキャストの効果は異なると考えられる。これには、L1 の影響や述語の特性が関わっていることが考えられ、これらがリキャストの効果に影響を及ぼすと解釈できる。RQ3 について、学習者の自己評価と回想コメントから、学習者の言語適性、学習方略と訂正に対する情意的反応がリキャストの効果に関わる個人差要因としてあげられる。学習者が正確さに拘らず、助詞の学習を重要視していない、また、言語を分析的に捉える傾向が低く、頻繁な訂正に抵抗感がある場合、リキャストは有効に作用できないことが示された。

本研究から、「一定の既有知識と言語適性をもっており、文法学習に関心があり日本語の正確さを重視する学習者にとって、格助詞のような卓立性の低い言語項目にもリキャストは有効に作用できる」という示唆が得られた。今後調査対象と言語項目の幅を広げ、研究方法を改善した上で、異なった視点で研究を実施することが望まれる。